
うちのジジイ、知りませんか？

きよこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うちのジジイ、知りませんか？

【Nコード】

N4229C

【作者名】

きよこ

【あらすじ】

ひいじいちゃんの世話をする羽目になった僕は、一週間田舎へ行くことになった。僕とジジイの忘れられない夏の一週間が始まる。

プロローグ：ジジイの家に行く理由

夏の夕暮れはなんだか寂しい。ジジイのしわくちやの顔は茜色で染まり、いつそうしわくちやを濃くしていた。

「お前にはわからんだろうが」

ジジイが今にも泣き出しそうな顔をしていたから。

先に僕が涙ぐんでた。

「人生なんて駆け足で過ぎていくんだ」

モゴモゴしゃべるから、なんて言ってるかいつもわからない。たぶん、そんなことを言っていた。

「全部、俺を置いてく」

足元に広がるスイカの果汁。そのピンク色の液体の上でスイカの種が泳いでいた。ジジイは力強く、スイカの種を遠くに飛ばす。

僕もまねして、種を遠くに飛ばしたけれど、ジジイのそれより飛ばなかった。

ジジイと僕のひと夏の思い出。過ぎ去る夏の、泡のように消えていく夏の思い出。

夏休みが始まったある日のことだった。

ミンミンゼミがとにかくうるさい自室で、クーラーがないことを嘆きながら受験勉強に励んでいた僕に、母がとんでもないことを提案してきたのだ。

「千裕^{ちひろ}、八月入ったら一週間、ひいじいちゃんのところに行つてきて」

お母さんのお爺ちゃんはまだご健在。確か今年で九一才。遠い片田舎で独り暮らしをしている。

なんで受験生の僕がそんなところに行かなきゃいけないんだ。

疑問は顔に出ていたらしい。

「なにぶうたれた顔してんのよ。あんた高校入ってから一度も行つてないんだから、今年くらいはひいじいちゃんに会って来なさい」

「あのさ、受験生なんだけど」

「受験より大切なことなんて、世の中たくさんあるのよ！」

よくわからない理屈が飛び出した。ひいじいちゃんのところに行くのが、受験より大切なことなのか？ いやいや、僕にとってはどう考えても受験の方が大事だ。

それに、八月の初めといったら、近所で花火大会がある。カノジヨとそれに行く約束だとしてしてるんだ。

「あのね、拓郎おじさんがね、海外旅行が当たったんだって。でも、ひいじいちゃんのお世話しないといけないから行けないって言ったの。お母さん、ひいじいちゃんのお世話、拓郎おじさんにまかせつきりだったから、たまには骨をのぼしてほしくてね」

拓郎おじさんとは、母の兄だ。ひいじいちゃんの家近くに住んでいて、ひいじいちゃんのお世話をしてる。

「だから、お母さん、言ったの。『旅行行ってきなよ。その間は、

「うちでひいじいちゃん世話するから』って」

よけいなことをっ！

「だったら、母さんが行けばいいだろが」

「お母さん、仕事だもん」

「拓郎おじさんとこにも、子どもいるじゃん」

「家族旅行なんだってば。おじいちゃんとおばあちゃん以外全員で行くのよ」

「おじいちゃんとおばあちゃんがいるんじゃない」

「お年寄りにお年寄りの世話させるの、あんたは！」

とうとう怒り出してしまった。顔を真っ赤に染め、目が上から引っ張ったみたいにつり上がる。やばい。鉄拳が飛んでくるぞ。避難せよ！

僕の脳内で赤いサイレンがウオーンウオーン鳴いている。僕は椅子を前に出し、母と自分の間に防波堤を作り上げた。

「いい？！ これは命令よ！ 八月二日から八日まで！ ひいじいちゃんの家でひいじいちゃんのお世話をするここと！ いいわね！」

と、いうわけで。僕はひいじいちゃんの家に行く羽目になったのである。

最悪で最高の、僕の一週間が幕をあげた。

プロローグ：ジジイの家に行く理由（後書き）

夏らしい作品が書きたくて、今回の連載をスタートさせました。主人公とジジイのひと夏の思い出に最後までお付き合いいただけたら幸いです。

八月二日…子泣きじじいがいた。

照りつける太陽に向かって、ひまわりが笑顔を向けている。オレンジ色の花卉を開き、太陽と同じになろうと頑張っているように見える。

あっちからこっちからミンミンゼミやらアブラゼミやらの鳴き声が止まらない。トトロに出てきそうな大きな木の陰に入ると、何匹か蟬の姿を見ることが出来た。

「つうか、あちい」

キャップをかぶり直し、顔をなんとか日陰に隠すが、その行為に何の意味があるのだろうか。日射病を防ぐためか？ 帽子の中は蒸れて蒸れてムンムンしてる。日射病どころかサウナのような暑苦しさに卒倒してしまいそうだ。しょせん僕は都会暮らしのもやしっこだ。……僕が住んでいるところも本当は田舎だが。

坂を下っていくと、ひいじいちゃんの家が見えてきた。赤い屋根は、記憶と寸分違わない。この家には中学校三年の時から、訪れていない。ひいじいちゃんは僕のことをちゃんと憶えているのだろうか。

母が出際の僕に不吉なことを言い残していたことを思い出す。

「ひいじいちゃん、最近ぼけてきたらしいから。あんたのことなんか忘れてるかもよ」

電車を降り、バスに乗り、歩いて十五分もかかって、ようやくひいじいちゃんの家にとどろ着いた。家の前には田んぼ。家の横には畑。家の裏には林。ご近所は歩いて五分。田舎を絵に描いたような景色が眼前に広がっていた。

遠くに見える山々だって、関東平野に住む僕にとっては久々に見るもので、わくわく半分、うんざりする気持ち半分。そんな気分だった。

一週間分の荷物が入ったカバンを背負い直し、ひいじいちゃんの家玄関の前に立つ。人の気配は無いが、一応がんとドアを叩く。叩いただけなのに、引き戸が少し開いてしまった。

田舎は平和だ。鍵なんていらならしい。

平屋の家屋は玄関を開けると土間が広がり、その奥に薄暗い台所。あとは八畳間が四つほどあるだけ。トイレは外で汲み取り式。風呂は増築したから新品だ。

「じいちゃん！　いないのかー？」

耳の遠いひいじいちゃんのために、これでもかと声を張り上げる。一歩踏み込んだ土間は、外の暑さが信じられないくらいひんやりしていた。

「じいちゃん」

なんとなく、不安になる。どうしよう。田んぼに落ちてたりしたら。ぼけだしたって言ってたし。

「なんだ」

「う、わっ」

玄関のところ——つまり僕の真後ろ——に立っていたのは子泣き

じいじ……もとい、僕のひいじいちゃん、木沢宗吉きざわそうきちだった。

「じ、じいちゃん、久しぶり。ひ孫の千裕だけど、覚えてる？」

自分が大きくなったからなのか、それともひいじいちゃんが縮んでしまったのか。ひいじいちゃんが以前より小さく見える。丸はげの頭。剃り忘れた無精ひげ。ステテコに赤いTシャツ。子泣きじいそっくり。失礼だが、笑える。

「お前、%&*P∥\$%’>?@だ#&¥が…*’¥し%!\$」
「……は？」

「だぎゃら、&#%…@は>’¥@…*か」

ひいじいちゃんの言語が、宇宙語になってる！ここはどこだっけ？確か地球のはずだ。もしかしたらひいじいちゃんは宇宙人にさらわれて、宇宙語を学んでしまったのかもしれない！

どうしよう！一週間も一緒に暮らすなんて、絶対無理だっ。言葉が通じねえもん！

「昼飯は食っでぎたのがって聞いてんだ！」
あ、良かった。日本語が出た。

ひいじいちゃんは気難しい人で、ただでさえ皺が入りまくった顔の眉間はさらにしわしわだった。そのせいかいつも怒っているように見えて、僕はどうにもひいじいちゃんが苦手だった。

高校一、二年とも、バイトを理由にここを訪れることを避けた。面倒くさかったから。

そんな僕がひいじいちゃんと一週間も過ごすなんてあり得ない。絶対無理。まず会話が出来ない。三年間会わずにいた月日が、さらに僕とひいじいちゃんに気まずい空気を作り出す。

三年。会わずにいた三年。

僕は体格も骨格もがっちりしてきたのに、ひいじいちゃんは細くなっていった。三年前は、あんなにはきはきしゃべっていたのに、今はつきりしゃべることも出来なくなっていた。宇宙語だと思った言語も、よく聞くとちゃんとした日本語だったし。

なんだが悲しい気持ちになる。申し訳ない気持ちになる。

「メシ」

「は？」

「昼飯、つぐれ。こののろま」

「……」

全然申し訳なくなんかねえし、悲しくもなくなった。

「それが終わったら、洗濯な」

僕は召使いじゃないんですが。世話をしに来たのは確かだが、命令されに来たわけじゃない。

モゴモゴと口を動かしながら、さも当然といった顔で、昼飯が作られてくるのを待つジジイ。たれた皮膚の下で、意地悪な目が光っている気がした。

冷蔵庫は汚く、ごちゃごちゃしていた。ギュウギュウに詰め込まれた食材は、なんとなく薄汚れている気がして、食欲が失せる。それでもなんとかやきそばを作った。賞味期限、三日ほど過ぎてたやつだけど。

「まずい」

「……あ、そう」

もそもそのやきそばは確かにまずい。だけどさあ、それをはつきり言っちゃうかね、このジジイ。

くちやくちやくと口を開けて食べるひいじいちゃんの姿を見ると、悪いけど食欲はさらに減退していく。食べたものがぼろぼろと皿に落ちる姿も、汚い。

三年前のひいちゃんは今なんじゃなかった。歳をとるって、怖いことなんだな。

夕飯もひいじいちゃんの「まずい」で終わった。

なんですか、この仕打ち。早く家に帰りたい。この前テレビで見たグレ○リンという映画で、ギ○モが「おうちに帰ろ」と言っていた姿を思い出す。今ここにギ○モがいたら、僕は彼（彼女？）を抱きしめてスキップ踏んで帰ることだろう。

一番風呂に入り、体を伸ばす。本当はひいじいちゃんが先に入るところだろうが、あの食事の汚さを考えると、どうしてもひいじいちゃんの後の風呂は嫌だった。

僕って、嫌なやつ。身内を汚いと思うとは。だけど、仕方ないじ

やないか。

「ああ……疲れた」

風呂桶に鼻まで浸かった時だった。いきなり風呂場のドアが開いたのだ。

そこにはイチモツを全開にしたひいじいちゃんがにたつきながら立っていた。

「千裕、背中流してやる」

「はあ？」

あばらが浮き出たひいじいちゃんの皮膚のたれまくった裸体。なんつか、目の毒。モザイク！ モザイク発動して！

「千裕、お前、胸ねえなあ」

「なに見てるの、えっち！ って僕は男だ！ 胸があるわけねえだろっ」

「お前、女じゃなかったのが？ 女みてえにちゃらちゃらしてやがるがら女だと思っでたわ。名前も女みてえだし」

……ボケ？ これボケ？ のるべき？ そるべき？ つっこむべき？

「お前、胸の無い女みてえだな。けっけっけ」

今、けっけっけって、妖怪みたいに笑いましたけど。僕にはそう聞こえたわけでして。うん。明日からはひいじいちゃんなんてかわいく呼んでやらないことにした。

明日からは「ジジイ！」だ。クソをつけないだけだと思いますってくれ。もちろん、ドスのきいた声で呼ぶよ。

覚えてろよ、ジジイッ

八月三日：うちのジジイはどこにいる？

朝起きると、ジジイはどこにもいなかった。朝つつつても、もう昼だが。やることもないのでテレビをつけるが、テレビはNHKしか写らなかった。ぶっ壊れているらしい。これならNHKも気分よく集金が出来るだろう。見るのはNHKだけですからね。あははは。

今日も太陽は元気がいい。爽やか過ぎる熱線をぎらつかせ、地面は焼けたように熱い。ジジイジジイと鳴くせみの声に、おお、お前もひいじいちゃんをジジイと呼ぶことにしたんだな、と呼びかける。カーキ色のキャップをかぶり、僕は外に出た。近所は歩いて五分钟かかるから、家の周りに人の気配は無い。ジジイはどこに行ったのだろう。

青々と繁った稲が波のように風でうねる。そこらじゅうから響いてくる蝉の声は止む気配すらない。どこからほつき歩いてきたのか、首輪をした柴犬がハッハと舌を出しながら僕の横をすり抜けていった。

たいして歩いてもいないのに、汗が額から落ちる。ジジイを探しにあぜ道を歩いてみたが、あるのは田んぼだけ。帰ってぐうたらしても暇だが、こうしてぶらぶら歩くのも暑くて嫌になる。

受験勉強するか。……うむ。やる気が出ません。

「お、店！」

十分ほど歩いていたら、店を発見した。そういや、三年前もこの店に来たっけ。駄菓子とかが売っていたはずだ。首を伸ばして店を見ると、店先にアイスが売ってあるのがわかった。僕は大喜びで店まで走る。

ガラス戸をのぞくと、駄菓子と生活雑貨が所狭しと並んでいたが、人の気配は無かった。とりあえず、アイスを選ぼう。僕は真っ先がりがり君をつかむと、ガラス戸を開けた。

「すいませーん」

「あら、ちい君？」

「え？」

「木沢さんとこの曾孫さんでしょ？」

「ああ、はい」

久しぶりねえ、と笑うぐりぐりパーマのちよつと太ったおばちゃん。この辺に若い子はいないから覚えていたのだという。

僕はがりがり君をその名の通りがりがりしながら、おばちゃんに問いかけた。

「うちのジジイ、知りませんか？」

「あら、さっきお饅頭買っていったわよ。まだその辺にいるんじゃない？」

かくしてジジイはいた。田園風景に不釣り合いな広すぎる道路。その脇にあるお地藏さんの横で、置物のように座っていたのだ。

ツバが異様にでかい麦藁帽子をかぶり、トレードマークですか？と聞きたくなる赤いTシャツを着て。饅頭をむしゃむしゃ食べる

姿は、さながらお供え物を勝手に食べている子泣きじじいだ。饅頭
はさっきの店で買ったやつなんだろうけど。

「ジジイ、なにしてんだよ」

「見てわがねえか」

「地蔵の饅頭を盗み食いしてる」

「ばかじゃねえか。休んでんだよ」

イラツと来ますね。こうイライラツと。ムラムラツとじゃないぞ、
間違っても。

ジジイを連れて、僕は来た道を戻った。ジジイはよたよた危なっ
かしく歩くから、仕方なくジジイの腕を取る。ジジイの歩調は極め
て遅い。家に着くまで何十分かかるだろうか。とめどなく流れる汗
は僕のTシャツをじつとりと濡らす。最悪だ。

「おじいちゃん、見つけたのね」

あの雑貨屋の前を通ったら、ちょうどお店のおばちゃんがいた。
おばちゃんは「よかったわねえ」とジジイの肩をさすっている。

「おじいちゃんねえ、久々に曾孫さんに会えるって言って喜んでた
のよ。ちい君はおじいちゃんのこと大切にしてくれてるみたいだか
ら、安心したわあ」

僕は思わずジジイを凝視してしまった。ジジイは僕の視線に気付
いているのかいないのか、モゴモゴと口を動かしているだけで何も
言わない。

ツンデレならぬ、デレツン？

どこか遠くから風鈴の音が聞こえる。田舎の夜は涼しい。時折、時間を間違えた蝉が「ジジイ」と鳴く。うんうん。やっぱジジイは「ジジイ」と呼ばなきゃな。

僕は縁側に座り、真っ暗な空を見上げていた。人口の明かりが少ない田舎の夜空は墨で染めたように真っ暗で、星は空一面に広がっていた。

ケータイを取り出し、カノジョに電話をかける。昨日はジジイに驚かされっぱなしでカノジョに電話出来なかったから、怒ってないというが。

『もしもし』

「あ、理子。ごめん、昨日は電話しなくて」

すぐに侘びを入れると、理子は「しょうがないなあ」と笑ってくれた。ちくしょう、かわいいやつつ！ 理子と付き合いだしたのは一ヶ月前。お互い受験生だから付き合うことに悩んだけれど、やっぱり好きあってんのに付き合い合えないのはおかしいだろうと、告白から三ヶ月もしてから付き合いだした。待たされたせいか、僕たちはおしどり夫婦なみに仲良しだ。

『どう？ そっちは？ 楽しい？』

「それがさあ、ジジイがもうめちゃくちゃでさあ……。疲れるよ」
電話の向こうでくすくすと笑う声が聞こえる。ああ、会いたいなあ。学校で毎日会っていたから、ほんの数日会わないだけで恋しく

なる。

「花火、ごめんな」

『ううん。帰ってきたら、別の花火大会に連れてってよ。それで許したげる』

理子とは花火を見に行く約束をしていた。だが、ジジイのところに行くはめになったせいで中止になってしまった。

くそ。花火。理子の浴衣姿。理子のうなじ。理子の顔。見たかったっ。

ふと、なにか忘れている気がした。喉の奥につまって出てこないけれど、何か誰かと約束をしていたはずだ。誰とした約束なのかも内容さえも思い出せない。胸にちくちくとささる。なんだろう？なんなんだろう？

思い出せないということは、きっとその程度の約束。どうでもいいようなことなのだろう。僕は理子との会話に専念することにした。

理子と十五分ほど話した後、「おやすみ」と言ってケータイを切る。早く帰りたい。理子に会いたい。縁側に寝そべり、理子の顔を思い浮かべる。長い黒髪をお団子にしたかわいい理子の顔が目の前にある気がした。

「おやすみはーとってか。きもぢわるいやつだな」

理子の顔が子泣きじじいに変わった！ 理子が、僕の理子が！

「って、ジジイ！」

ジジイが僕の顔をのぞきこんでいた。理子の顔が子泣きじじいになるなんて、なんつー恐怖。真夏の恐怖はこんなところに健在だ。

「花火」

「は？」

「d p れ、 * @ t p @ + *」

また宇宙語だよ。何つつてんのかさっぱりわからねえ。

ジジイは宇宙語をしばらくしゃべった後、唇を梅干みたくに尖らせて家の奥に行ってしまった。

なんなんだよ、一体。

八月四日..饅頭好き!

今日もからっからの晴天。白い雲は高い空の上で悠々と風に吹かれている。風があるせいかな、昨日よりも涼しい気がする。空は果てしなく青く。大地はどこまでも緑色。それでもってジジイはまたもや行方不明。

昨日も行った雑貨屋に行くと、ぐるぐるパーマのおばちゃんがタダでアイスくれた。

ラムネ入りのアイスは口の中でしゅわしゅわして、うまい。

「あの、うちのジジイ、知りませんか？」

また同じ質問を繰り返すことになろうとは。

おばちゃんはそろばんで売り上げの計算をしながら、「饅頭買ってどこか行ったわよ」と苦笑いした。

どんだけ饅頭好きなんだよ。

「……いつも饅頭買ってるんですか？」

「ほぼ毎日かしらね。ほら、木沢さんちのおばあちゃん、お饅頭好きだったから」

そうだったの？ 知らなかった。言われてみれば、毎年遊びに来るたびにお饅頭が出てきた気がする。年寄りってそういうもんだと思っていたから、気にも留めてなかったな。

「二つ買ってくのは、おばあちゃんにお供えするためなのかもしれないわねえ」

おばちゃんは独り言のようにそう言って、またそろばんをはじき出した。

オニヤンマがさあつと僕の耳のすぐそばを横切り飛んでいく。

小さいころはあのだでかいトンボを捕まえることに命をかけていたが、今となつては、でかすぎてキモイ。

そう、小さいころは、ここは僕にとって楽園だった。カブトムシもクワガタもトンボもいたところに生息していて、持参した虫かごは虫天国になっていた。虫からすれば地獄だろうが。

いつの頃からか、この魅力は僕の中で消えていき、ここを訪れることが億劫になっていった。

僕が中学二年の時、ひいばあちゃんが亡くなった。

ひいばあちゃんは優しくて温かい人で、僕はひいばあちゃんが本当に大好きだったから、ひいばあちゃんがいらない田舎なんて信じられなかった。

中三になって、僕はひいばあちゃんのいないここを訪れ、心の中にぽっかり穴があいてしまったような空虚感を初めて感じた。その人が在るべき場所に在るべき人がいない。それはまるで心に穴を穿ったような、冷たい風がひゅうひゅうと抜けていくような空しさ。

人が死ぬということは、そういうことなんだ。

僕は怖かったのかもしれない。ここに訪れるということは、またその空しさを味わうということを意味するから。

まあ、ジジイのせいでもそんなこと感じる暇もなかったが。

僕とジジイはそれまではあまり接触のない関係だったように思う。ここに来て僕も僕はひいばあちゃんとばかり話していたし、ジジイはいつも家の奥か畑にいて、顔を合わすこともあまりなかった。ジジイの人間性を僕はほとんど知らなかったことに、今更気付いた。

ジジイはまたもや地蔵の横で、もしやもしかと饅頭を食べていた。だからさ、口は閉じて食べようよ。あんこがジジイの金歯と金歯の間から見え隠れ見え隠れ。

「ジジイ、帰るぞ」

「まだ食べ終わってねえだろが」

そう言って、もしやもしか。僕はジジイにわかるようにわざとでかいため息をついて、ジジイの隣に腰を下ろした。膝に肘をつき、頬杖をつく。

「いつもどこに行ってるんだよ、饅頭買って。心配するだろが」

「P；*？　＼＼　％だ\$ばL#；+」

また宇宙語だし。もうまじで意味わかんねえ。

「食べ終わった？」

「まだ噛んどる」

こうさ、頭をポンとどついてさ、あんこを口から出してあげたいね。

「お前は幸せもんだ」

「は？」

もぐもぐと口を動かしたまま、ジジイはよっこいせと腰を上げ、よたよた歩き出してしまった。僕は慌ててジジイの横につく。腕を取り、ジジイの歩調に合わせて歩く。支えてやらないと、すぐに倒れてしまいそうで、どうにも怖い。

「おりゃあ、幸せもんだな」

ジジイはジジイの腕をつかんだ僕の手を二度軽く叩いた。

「お前はいい曾孫だ。物忘れが激しいごと以外は」

「なんだよ、それ」

けっけっけ、とジジイは妖怪みたいな笑い声をあげ、ずりずりと足をひきずるように歩く。

「俺のほうがお前より、色々覚えでる。お前、俺より年上だろ、本当は」

いや、それ、ありえませんか。僕はそしたら何歳だよ。僕は妖怪か？ ジジイの方がよっぽど妖怪だっつーの。

だけど、ずいぶん意味深な言葉だ。僕、何か忘れてる？

あ、買い物行くの忘れてた。

夕方、涼しい風が吹き出す頃、僕はトマトときゅうりを取りに畑にやって来た。スーパーにある買い物かごがなぜか一個置いてあって、それにとった野菜を入れて来いとジジイの命令。夕飯を買い忘れたから、材料が無い。今日は自家製野菜がメニューだ。

スーパーに置いてあるようなきれいな形の野菜なんてここには無い。思い思いに好き勝手な形に巨大化した野菜たちが僕を出迎えた。というか、なんでいつもこいつもこんなに巨大？ ジジイの野菜作りは謎に包まれている。

手の平よりもでかいトマトは、二つになるはずのトマトがひとつに合体し、ハート型になっている。理子に見せてやりたい。

この巨大なきゅうりは、「ヘチマです」と言われても僕はきつと疑わないだろう。

ナスはヘタの付近はイガイガしているらしく、ヘタには触らないようにして取れ、と言われた。

トマトにナス、きゅうりにみようが。トウモロコシに枝豆。夏の旬野菜が勢ぞろい。ザ・田舎を満喫しているようで、なんとなく楽しい。

お母さんも言ってたな。世の中には受験より大切なものがあると本当に大切なのは、こういうことを学ぶことじゃないのかね、その君。ってどこの君だよ。

ま、こんなに旬野菜が取れたところで、僕が作れるのは野菜炒めだけなのだがね、その君。だからどこの君だよ。

僕はいつの間にか、それなりに田舎生活を楽しみ始めていた。ジジイはジジイで好き勝手に生きてるし。こういう夏休みも案外いいかもしれない。

八月五日：墓の前で独り言

タオルケットを抱え、夢の世界を彷徨っていた時だった。

バシンツという叩きつけるような音が聞こえて僕は目を覚ました。朝日がまぶしい。すでに活動を始めたセミたちが今日もこれでもかと鳴いている。

さっきの音はなんだったんだろう？ まだ重いまぶたをこすりながら辺りを伺う。

網戸にした窓にでかいカブトムシが張り付いていた。さっきの音はこいつが網戸に体当たりした音だったんだ。大きさは十センチはあるだろう。捕まえたら高く売れそうだ。

布団を蹴飛ばして立ち上がり、窓に近寄る。こうやって近くで見ると、カブトムシの腹の方ってゴキブリみたいだ。この足の付け根辺りがなんとも言えず、ゴキブリ。

そう思ったら、なんとなく触ることを躊躇してしまう。うーん。虫ってよく考えると気持ち悪い。

そんなことを考えながらぼんやりカブトムシを見ていたら、玄関の方でガタガタと音が聞こえた。ジジイがどっかに出かけようとしているようだ。

僕はいつもはあと三十分は寝てる。だから起きるとジジイはいつもいなかった。ジジイはどこに出かけているのだろう。

湧いてきた興味は消えない。僕はその辺に転がっていたTシャツとハーパンに着替え、ジジイの後を追った。

ジジイは雑貨屋に立ち寄り、饅頭を二個買う。そのまま広い道路の脇をよたよた歩き、迷う様子なく進んでいく。

僕はジジイに気付かれないように、ある程度の距離を保って、後ろをついていく。

今日も晴れ。

大きく生えたとうもろこしが風でゆらゆらと揺れている。僕は心の中で「ざわわゝざわわゝ」と歌う。あ、あれはサトウキビ畑か。似たようなもんだからまあいいや。

一方ジジイはあっちへよたよたこっちへよたよた。酔っ払いのオヤジが寿司の土産を持って歩いている図に似てる。車通りが少ないとはいえ、広い道路でよたよたされるのはどうにも不安だ。

走り寄って腕を支えてやりたい衝動に駆られるが、今はジジイがどこに行くか追跡する方が大事だ。我慢我慢。

しばらく歩くと、ジジイが前に座っていた地蔵の前を通り、そのすぐそばにある脇道に入った。木が生い茂り、まるでトンネルのようになった小道の先。僕はこの場所を知っている。

ひいばあちゃんのお墓だ。

雑貨屋のおばちゃんが言っていた言葉を思い出した。

「二つ買ってくるのは、おばあちゃんにお供えするためなのかもしれないわねえ」

饅頭が大好きだったひいばあちゃんのために、じじいはいつもここに來ていたのか。

小さな墓所のここにはひいばあちゃんの墓を含め、数えるほどしか墓石は無い。

ひいばあちゃんの墓は、墓場を囲む生垣のすぐそばにある。ジジイが墓場に入るのを見届けた後、僕は生垣の後ろに身を隠し、ジジイが出てくるのを待つことにした。

つけてきたことがばれたらジジイは怒りそうだから帰ろうかとも思ったが、あんなよたよた歩きしているのに一人で帰すのは危なかしすぎる。偶然を装い、一緒に帰ろう。

生垣の隙間から見えるジジイの姿を窺う。ジジイは饅頭を一個、墓に供え、手を合わせて、しゃべりだした。声がでかいから、ここにいるジジイの声は聞こえてきた。

「まだ迎えに來でくれないのか」

心臓がバクン、と鳴った気がした。迎え？　迎えって……

「もう五年も待っただんだ。そろそろ迎えに來い」

ひいばあちゃんがなくなったのは五年前だ。五年も待ったって、どういう意味？　なんとなく答えはわかっていたが、僕は否定の感情が強くてそれを肯定することが出来ない。

「もう、待ちくたびれだ。早くお前のところに行きたい」

毎日。毎日毎日。ジジイはひいばあちゃんの墓前で、そんなこと

を願っていたというのか。

「……千裕は、昨日もまずい飯をこさえたぞ。あいつに料理の才能はねえな」

「……おい！　ちよつと、才能無いって。」

「……去年は、お前はいないし、千裕は約束しだのに來ないし、去年ほど寂しい日は無かったなあ」

約束？　僕はジジイと何か約束をした？　胃に何か残っているような気がするが、それを吐き出すことが出来ない感覚に似てる。思いつけない。僕は、大事なことを忘れてる？

「じゃあ、まだ明日来るがらな」

ジジイが立ち上がったのがわかったから、僕はそつと場所を移動し、ジジイが通る道から見えない場所に隠れる。

ジジイは、ひいばあちゃんのいるところ……天国に行きたがってる。なんでだ。どうして。そりゃ、歳が歳だし、死が身近にあるのは仕方ない。でも、それでもそんなことを考えてほしくなんかない。じわじわと涙が込み上げてくる。なぜだかわからないけどくやしくて、悲しくて、情けなくて。でも泣くなんて格好悪いから、必死にこらえることしか出来なかった。

入道雲がどんどんふくれあがっている。もしかしたら一雨降るんじゃないだろうか。そんなことをぼんやり考えながら歩いていた。遠くで地鳴りのような音がある。

「ちい君」

僕の名を呼ぶ声で、僕ははっと我に帰った。雑貨屋の前にいつの間にか来ていた。雑貨屋のおばちゃんがにこにこ手を振っている。「ねえ、おばちゃんとこに、おばあちゃんっている？」

「ん？ もう死んだよ。三年前かね」

「死にたいとかって、言ったことあった？」

僕の質問に、おばちゃんは怪訝そうな顔をした。二重顎に手を当て、「そうねえ」とぼやききながら、記憶の糸をたどってくれている。

ゴロゴロとオヤジの腹の音みたいな音が空から聞こえてきた。雷が来そうだ。

「死にたいなんて言ったのは聞いたことないけど、よく言ってたよ。歳を取ると『死』は影みたいなもんになるって」

「影？」

「普段はあることには気付かないけど、毎日自分のそばにいて。影って、そうでしょ？ 怖いように感じるかもしれないけど、相棒みたいなもんで、怖くないってよく言ってたよ」

気付くと空は真っ黒な雲に覆われていた。さっきまでは晴れていたのに、あつという間に辺りは薄暗くなっている。

「こりゃ、雷雨になるね。ちい君、早く帰りな」

「うん、じゃあね、おばちゃん」

ジジイはちゃんと家に帰っているだろうか？ ちゃんと家まで送ればよかった。

僕は広がる雲と同じように心を覆い尽くそうとする不安を胸に、雨が降り出した道を走り出した。

家に着いた頃には、雨は本格的に降り出していた。

雷の音。瞬く光。ざあざあと降るうるさい雨。それと対比するように、家はしんと静まり返っていた。嫌な予感を覚える。

僕は玄関を乱暴に開け、土間から見える居間に駆け寄る。居間には誰もいない。奥の部屋にも。どこにも、ジジイはいない。風呂場にも、外にあるトイレにも、どこにもジジイはいない。

ジジイは歳だ。この雨で風邪ひいたら、それだけで死ぬかもしれない。あのよたよた歩きなら車にひかれたっておかしくない。田んぼに落ちて溺れる可能性だってある。

——もう五年も待っただんだ。そろそろ迎えに来い。

ジジイがひいばあちゃんの墓前で言っていた言葉が脳内を駆けめぐる。

薄暗い奥の間にある仏壇。そこで微笑むひいばあちゃんの遺影。

僕は仏壇に走り寄り、ひいばあちゃんの遺影を睨みつけた。

「まだ連れてくのは早いからな！ そりゃ、ジジイはもう九一才だし、すぐ死んでもおかしくないけど、まだ早いんだよ！」

雨で濡れたTシャツが重い。ひたひたと頭から垂れる水がうざい。濡れた足は畳で滑る。僕はこけそうになりながらも、ジジイを探しに外に行こうと決めた。

雨はいっそう激しくなり、窓を叩きつけている。庭に咲いたひまわりが、雨でゆらゆらと揺れていた。

玄関を開け、一步外に踏み出した時だった。

「こんな雨ん中、どこ行ぐんだ？ お前、バカだろ」

……ジジイがいた。
まったくもって濡れていないし。

「……どこ行ってたの」

「熊野んちだ。雨降ってきたから送ってもらった」

「熊野って誰」

「隣の家だ」

隣の家ってどこだよ？ 歩いて五分かかる家は隣の家とは言わねえだろっ！

ああ、心配して損した。

「心配したんだからな！」

怒鳴りつけてやると、ジジイは口を梅干のようにして、さっさと部屋に入ってしまった。

八月六日..悲しい夕暮れ

昨日の雨は意外とすぐに止んでしまった。通り雨ってやつだったみたいだ。

雨なんて降ってましたっけ？　と言いたげなほど、今日も大盤振る舞いで太陽が照りつける。昨日の雨で顔を出したアマガエルが日光の強烈さにやられて、縁側の下で死んでいた。

僕はぼんやりとアマガエルの死体を眺めながら、縁側に座っていた。

トンボがすいすいと空を飛んでいる。アゲハチョウがふわふわと花の間を言ったり来たり。蝉はバカうるさい声をあげ続ける。ジジイは今日もよたよた出かけた。

昨日の出来事のせいで、どうも気が抜けた。年寄りのジジイを僕は心配しすぎているような気がする。あんな歳でも、ジジイは強かに生きてるし、いたって元気だ。とっさに死んでしまうんじゃないかなんて考えたけど、ありえねえ。ジジイは百二十歳まで生きるタイプだ。

なんだか、ばかばかしい。

見上げる空は筋状の雲をたなびかせ、青々と広がる。白い太陽光線は放射状に飛び、すべての生き物を生き生きと彩る。

ああ、自然界って素晴らしい。

縁側ですっかりひなたぼっこムードに入っていたが、そろそろ行かなくては。

買い物。昨日は雨のせいで買い物に行かなかったし。今日こそは。肉食べてえ！

バスに乗って二十分。ようやく賑わいのある街に出た。賑わいがあるとはいっても廃れた感をひしひしと感じるが、街は街だ。

スーパーの店先に『花火大会、八月七日開催』と書いたポスターがいっぱい貼ってあった。中途半端な日に花火大会があるんだ。こういうのは土日やるイベントじゃないのか？ 手書きのそのポスターから、その花火大会のしよぼさがわかる。行く人なんているのかな。

さびついた看板を掲げたその小さなスーパーに入り、僕はとにかく肉を買い物籠に入れていく。昨日も一昨日も野菜まみれだった。育ち盛りの若者には肉が必要なのだ。

荷物を抱え、家に戻る頃には十五時を過ぎていた。こんな時間になっても、太陽はその光を弱める様子はない。

両手に持ったスーパーのビニール袋が手に食い込み、痛い。

強い風が青々とのびた稲をあおり、風の吹いた形跡を残してゆく。その風に乗るように鳥が飛んでいった。

スーパーに行くだけで疲れた。

僕はすっかり指定席になった縁側に腰を下ろし、重くなってきたまぶたを閉じる。風が気持ちいい。暑すぎる太陽の光も、なんだか心地いい。僕は夢の世界に落ちていった。

「おい、千裕」

カサカサした手が僕の顔を叩く。せつかく気持ちよく寝ていたのに。

うう、と一回うなり声をあげ、僕は体を起こした。いつの間にやら夕暮れの時間を迎えていたのだ。

真っ赤に染まった空。「カナカナカナカナ……」と鳴くヒグラシの声と共に「ツクツクボウシ」と名乗りをあげるツクツクボウシ。

まだ夏は始まったばかりなのに、ヒグラシとツクツクボウシの声は夏の終わりを告げているかのように感じる。物悲しい、切ない気持ちになるのはなんでだろう？

「千裕、スイカ食べるか？」

「食べる！」

いつの間にか用意されたスイカ。四つに切っただけだから、ひとつひとつがすぐでかいんですけど。

ジジイは僕の隣に腰を下ろし、でかいスイカを手取る。シャクツと小気味良い音を立て、スイカをかじっていく。僕もスイカにかぶりつくと、スイカの甘い果肉の味が口中に広がり、果汁がひたひたと口の端からこぼれた。

「昨日は悪かったな」

スイカの種をぺつと庭に向かって吐き出しながらジジイはそう言った。あんまり申し訳なくなさそうだが、ジジイがしょんぼりした顔で謝ってくるわけが無い。言葉に出して謝ってくるなら、一応反省しているのかなと思う。

「別にいいけどさ。……心配したんだからな。どっかで死んでんじゃないかって」

腹の中でぐるぐるとスイカの果肉が回っている気がした。言わなきゃいいのに、と思うのに、口からすべり出てくる言葉。

「死にたがるのやめろよ」

「なんでそう思う？」

シャクリ、とスイカにかじりつく音がする。滴り落ちるスイカの汁がアスファルトの地面をピンク色に染めていた。

「ひいばあちゃんの墓の前で、『早く迎えに来い』って言ってたろ」

「聞いてたのか」

「聞いてた。ごめん」

ヒグラシが鳴く。たった一週間で死んでしまう蝉は、どういう気持ちで鳴き続けているのだろうか？

茜色に染まる世界。

「お前にはわからんだろうが」

ジジイの横顔は茜色で染まり、しわのひとつひとつが彫刻のように浮き出していた。歳を重ねただけ年輪のように刻まれるしわが、その時はまるで光り輝いているように見えた。

ジジイは今にも泣き出しそうな顔をしていた。僕はそれに気付いた途端、目に涙がたまっていくのを感じた。

一日の終わりを告げる夕焼けと、夏の終わりを告げる蝉の声と、人生の終焉を迎えつつあるジジイの姿が重なって見えたんだ。

「人生なんて駆け足で過ぎていくんだ」

手に持ったスイカからポタリポタリと果汁が落ちてゆく。

「全部、俺を置いてく」

ジジイの目は、とても遠く、遠くを見据えていた。僕には見えな
い遠い空の向こう。

「俺を残して、皆死んで。残された俺に、何がある？ いずれ歩けなくなつて病にかかつて、家族に迷惑をかけるくらいなら、早く死にたいんだ」

「迷惑なんて、思わないよ」

「きれいごとはやめろ。お前は、俺の横をずっと歩けるか？ 俺がよろけるたびに支えられるか？ 俺の排泄物の処理を出来るか？

汚ねえ食事の後始末を文句ひとつ言わずに出来るか？」

僕は反論の言葉さえ思い浮かばず、押し黙る。僕はジジイの食事を見てどう思った？ 汚いと、……そう思ったんだ。

「それでいいんだ。汚ねえもんは汚ねえ。出来ないもんは出来ない。それでいい」

「でも、僕は、ジジイに死んでほしくなんかない。迷惑だと思つても、文句いっぱい垂れたくなくても、やっぱりジジイには生きていてほしい。そう思うのは、本当だ」

次第に濃くなつてゆく闇の色。紫色に染まった空の下に、無くなつてゆく茜色。一番星がちらりと見えた。

「お前もあつという間にジジイになる。大切な人は気付いたら横になくなる。大事にしろ」

「……うん」

ジジイはにっと笑い、頬を膨らませて口の中に残っていた種を吹っ飛ばした。ひゅつと音を立てて飛んだ種は、庭に咲いたひまわりのすぐ下に落ちた。僕も真似して種を飛ばしたけれど、ジジイの半分も飛ばなかった。

ジジイは「まだまだだな」と笑い、いつの間にか食べ終わったス

イカの皮を持って立ち上がった。

僕は慌ててジジイの背中に声をあげた。

「ジジイのことだって、大事にしてんだからな！ 死にたいなんて言うな！ いなくなったら寂しく思うやつがいることを忘れんな！ 皆死んだって、ジジイの血をひいてるやつは生まれてくるんだ！ 置き去りにされてばかりじゃねえよ！ 追いかけてくるやつがいることを忘れんなっ！」

ジジイはわかってない。ジジイが死んだら、ジジイに置き去りにされるのは、僕なんだ。

八月七日…約束とご近所さん

『どう？ ひいじいちゃんとはうまくやってる？』

ケータイに母さんから電話がかかってきたと思ったら、のん気な声。朝も早い（本当はもうすぐ昼間だが）時間からこののほほんとした母親に僕はむかつ腹がたつ。

日本家屋のこの家は、南側はすべて縁側になっているから風通しがいい。そのため、くそ暑い夏でも快適に過ごせる。それでも、やっぱり暑い日は暑い。

汗だくで目を覚まし、のん気な母親の声を聞く羽目になったら、イライラするのも仕方ないだろう。そうでもないか？ まあいいや。

「普通にやってる」

ぶっきらぼうに返事をするが、母さんが僕のイライラに気付く様子はない。

「そう。明日までなんだから、ちゃんとひいじいちゃんのお世話するのよ」

じゃあ、と言って電話を切ろうとする母親に向かって、僕は慌てて声をかけた。聞きたいことがあったんだ。

「僕さ、ひいじいちゃんと何か約束したことあった？ 去年僕が行かなかったから寂しかったってひいじいちゃんが言ってたさ」

『ええ？ 知らないわよ』

あっさりしたお返事。こそあど言葉でしかしゃべれないような物忘れの激しい母親が憶えているわけないか。あれ、これって遺伝してる？

『そういえば、ひいじいちゃん、去年、あんたは本当に来ないのかってずっとわめいてたらしいわよ。花火大会の日とかは「うるさい

っ」って言いたくなるくらいずっと言ってたって。拓郎おじさんの話だけどねえ』

花火大会？ 昨日行ったスーパーに貼られていた八月七日の花火大会のポスターを思い出す。

僕はジジイと約束をしたはずなんだ。いつ？ どこで？ どんな時に？

……思い出せない。

母さんは電話越しに何か言っていたけれど、僕は「じゃあね」と言って無理やり切った。

思い出さなければいけない気がした。きっとジジイにとっては大切な約束だったんだ。僕からしてみればテキストにその場しのぎで言ったような、思い出すことも出来ない言葉だったのだとしても。

今日は僕もジジイと一緒に墓参りに行くことにした。ちゃんとひいばあちゃんに挨拶しなければ。

今日もよたよた歩くジジイの腕を取り、雑貨屋で饅頭を三個買う。

風でさんざめく木のトンネルをくぐり、小さな墓所にたどり着く。大きくぬぎの木が、ひいばあちゃんの墓に影の模様を作り出していた。ミンミンゼミがすぐ近くで鳴いている。

ジジイは何も言わずに饅頭を一個墓前に供え、もぐもぐと口を動かす。僕はその横で手を合わせ、ひいばあちゃんの冥福を祈った。

甲高い蝉の声。揺れる木漏れ日。体を焼く太陽の熱線。

そうだ。前にもこんなことがあった。あれは……あれは中学三年の時。ひいばあちゃんが死んだ翌年だった。

ひいばあちゃんがなくなった寂しさから、当時のジジイは背を丸くして黙していることが多かった。もともとジジイとあまり会話を交わさなかった僕にとっては、ジジイがそんなに変わったように見えなかったけれど、母さんは「ひいじいちゃん、寂しそう」とぼやいていた。

お盆に家族で帰省した日。ジジイと一緒に墓参りに行った。

今と同じように、ジジイはももごと口を動かし、ただじっとひいばあちゃんが眠る墓を見つめていた。

——約束したのに。

か細い声でそう言っていた。聞き返す僕に、ジジイは墓を見つめたまま答えたんだ。

——俺が九十歳になったら卒寿のお祝いに花火を見に行こうって。なのに、先に逝っちまいやがった。

僕は……あの時なんて言った？ ジジイの寂しそうな背中になんて声をかけた？

そうだ。僕は——

「僕と一緒に行ってやるよ」

——そう、言ったんだ。

ジジイが九十歳を迎えたのは去年。僕はバイトを理由にして、ここに訪れなかった。ジジイは、僕との約束を覚えていたんだ。僕はすっかり忘れていたというのに。

ジジイと一緒に、お地蔵さんの横に座り、饅頭を食べる。もそもそとした饅頭とこの暑さのせいで、僕は喉の渴きを感じる。

僕は薄情だ。ジジイは僕との約束を楽しみにしていたに違いない。それなのに、僕は……。

ちらりとジジイを見ると、いつもどおり大口を開けて饅頭をずっと咀嚼そしやくしている。……牛みたいだ。

今からでは遅いのだろうか？ 今日には花火大会だ。ひいばあちゃんひいばあちゃんの墓前で思い出せたのは、ジジイを花火大会に連れていってくれとひいばあちゃんひいばあちゃんが思い出させてくれたのかもしれない。

そうだ。連れて行ってあげよう。お詫びの意味も込めて。

ジジイと一緒に家に帰り、僕はまたすぐに家を出た。

雑貨屋のおばちゃんのところに行って、自転車を借りるためだ。

ジジイの足ではバス亭までの距離だって遠いから、自転車の後ろに乗っけて行った方が早い。

錆び付いたママチャリをおばちゃんおばちゃんは快く貸してくれた。

漕ぐ度にギコギコと軋こんだ音をたてる自転車に乗って再び家に帰ると、お客さんが来ていた。色の黒い線の細いおじさん。僕の父さんと同じ年くらいだろう。線が細い割には、腕の筋肉はがっちりついていた。

ジジイと麦茶を飲みながらガハガハ笑うおじさんは僕を見るなり、

白い歯を出してさらに笑い、お隣の熊野だと自己紹介してくれた。
一昨日の雨の日にジジイを送ってくれた人だ。僕はお礼を言って、
また外に出た。知らない人と話すのはどうも苦手だ。

陽が落ちてきて、辺りはだんだん薄暗くなる。なのに熊野さんは
帰る様子なし。

僕は家の前のあぜ道でトンボを捕まえては放すというむなしい遊
びを繰り返していた。

なぜだか出前寿司がやって来て僕に寿司を渡して去っていくし。
「代金は？」と聞いたら「熊野さんところでもらうからいい」と言
われた。

っておい。熊野のヤロウ、いつまで居座る気だ！ 花火が始まっ
ちまうじゃねえか！

寿司を熊野のヤロウに渡すと、なぜか僕も混じる羽目になり、本
来なら飲んではいけないビールまで飲まされた。

外では地響きのような花火の音が聞こえ始め、僕は内心かなりあ
せるが、熊野のヤロウがそれに気付くわけもなく。

「今日は花火大会だったなあ。ガハハ！」と笑う熊野のヤロウの顔
にパンチをくらわせてやりたい衝動を抑えつつ、僕は大好きなウニ
を熊野のヤロウにはやらないぞと、ウニをあつという間にたいらげ
て、心の中で復讐した。

腹に響く花火の音が聞こえる。

ジジイと見に行くはずだった花火。

去年も見ることが出来ず。今年も熊野のヤロウのせいで見るこ
とが出来なかった。

熊野のヤロウ、覚えてろよっ……。

八月八日…ジジイとバイバイ

今日は帰る日だ。我が家は遠いから夕方にはここを出ないといけない。いつもより早く起きて、雑貨屋のおばちゃんに借りた自転車に乗る。

軋んだ音をあげる自転車でも、爽快に風を切る。太陽の光は相変わらずくそ暑いけど、風は気持ちいい。だが、だんだんペダルが重くなってきた。上り坂だ。

緩やかな傾斜とはいえ、この暑さの中、力の限り自転車をこぐのはなかなかの重労働だ。体中から溢れ出る汗と口からこぼれる吐息。犬のように舌を出しながら上り坂を登り切ると、雑貨屋が見えてきた。

「おばちゃん」

ガラス戸を開け、おばちゃんを呼ぶ。おばちゃんはカキ氷片手に店の奥にある部屋から顔を出した。

「ちい君、ちようどいいところに来たわね。カキ氷食べる？」

待ってました！ 僕は首をぶんぶん縦に振って、遠慮なく部屋に上がらせてもらった。

イグサの香りがなんとも心地良い。薄暗い和室の軒先で、涼しげな風鈴の音が響く。

おばちゃんはイチゴシロップがたっぷりかかったカキ氷を持って来てくれた。喉が渴いていたから、すごい勢いでがつついてしまった。眉間がキーンと痛くなる。

「おばちゃん、僕、今日で帰るんだ」

「あら、そうなの。寂しいわねえ」

本当に残念そうに言ってくれるから、なんだか照れくさくもあり、嬉しくもあり。

「おばちゃんはさ、約束を破った時ってどうする？ 破ったことに気付いてなくて、埋め合わせする機会もなくて、謝ればいいやつて問題でもない時」

なんとなく、僕はおばちゃんに昨日の出来事を話してしまった。ジジイを知っている人に相談したかったんだ。

おばちゃんはもう溶けてただの水になってしまったカキ氷をスプーンで混ぜながら、少しあ考えた後、いたずらっ子みたいな笑みを浮かべた。

「私だったらねえ……」

日陰に隠れていた白い猫がのそりと起き上がり、僕に体をすり寄せる。野良猫にしてはずいぶん人懐っこい。

僕は荷物を抱え、ジジイと向き合っていた。

もうすぐ日が暮れる。それでも太陽は高い位置から熱線を注ぐ。陽が落ちる前の悪あがきみたいだ。

「じゃあ、帰るから。一週間、ありがとな」

ジジイはモゴモゴと口を動かし、僕の背中の方こうに広がる田んぼを見つめている。

人の話聞いてんのかよ？

「また来るから」

「またっていつだ」

怒っているような口調。ジジイ、実は寂しがってる？

「わかんねえけど、また来るって」

「わかんねえなら、今決めろ」

どういう理屈だよ。僕は苦笑するしかない。

「早く帰れ。電車に乗り遅れるぞ」

僕を追い出すようにシッシツと邪険に手を振ってくる。けれど、ジジイの目がほんの少し潤んでいることに僕は気付いてしまった。

「ほんとに、また来るから」

「約束か」

「約束するよ」

「どうせ忘れるだろ」

「今度は忘れないよ」

「信じられねえ」

早口の掛け合い。

だんだん寂しさが募る。

ヒグラシが鳴いている。たった一週間の命の火を燃やす彼らの鳴き声。僕がここに来た日に生まれた蝉は、僕が帰る日に死んでいくんだ。

「じゃあ、行くよ。またな、ジジイ」

「早く行け」

別れの時まで強がるジジイに手を振り、僕は大荷物を抱え直して歩き始める。後ろを振り返らずに歩き、T字路に差し掛かってやっとな振り返った。豆粒みたいに小さく、ジジイの姿が見えた。どんな表情をしているかなんてわからない。でも身動きひとつ取らず、ジジイはこっちを見ている。

たった一週間だ。あっという間に過ぎてしまった。だけど、僕はジジイと初めて面と向かって会話した気がする。ジジイの心の破片

を僕は垣間見たんだ。

生きれば生きるほどに、置いていかれる。周りの人間はどんどん死んでいき、ただ独りになる。それは、どんな気持ちなのだろう。寂しい？ 悲しい？ 苦しい？

でも、忘れてほしくなんかない。置いていかれるだけじゃない。人生は一期一会だって言うじゃないか。誰かと出会って、別れて。その度に何かが心に残って。

終わりはあっても始まりがある。別れがあっても出会いがあるんだ。それは何歳になろうが変わらないはずだ。

ずっと一緒にいた人が死んで寂しいってのがあるのだとしても、それでも。

ジジイのことを心配したり、考えたりしたりする人間がいることを忘れてほしくなんかない。

何百歳になろうが、独りじゃないことを忘れんな。

そうだ。約束を忘れても、取り返す術はある。見てろよ、ジジイ。腰を抜かさせてやる。

遠くから鳥の鳴き声が聞こえる。カエルが合唱を歌う。虫がジイジイと鳴きわめく。

おぼちゃんのところを買った百円ライターをつけると、そこだけほんのりと明るくなった。こうも真っ暗だと、唯一の明かりが逆に怖い。めらっと燃え上がったライターの光の先に、知らない人の顔とかが浮かび上がりそうでぞっとする。時刻はもうすっかり夜。

プラネタリウムみたいな夜空。明日もきっと晴れるだろう。

「よし。見てろよ、ジジイ」

じりじりと火種がくすぶる。導火線はみるみる短くなり、真っ黒な夜空に向かって低い音が轟く。瞬間、ソーダ水が弾けるような音。白い光が爆ぜる。息をつく間もなく次の光が空に向かって飛んでゆく。白い光がスキの穂みたいな形を作る。

「じーーーーーじーーーーいーーーーー！」

ジジイの家の前に広がるあぜ道で、僕はそれでもかと声を張り上げる。隣近所にも聞こえてるかもな。どうせ隣近所は熊野だし。迷惑かけても知ったこっちゃない。

隣近所に聞こえても、耳の遠いジジイに僕の声がちゃんと届くだろうか。

ヒュンヒュンと風を切っては空に模様をつけていく光。
それを背にして、僕は叫ぶ。

「じーーーーーじーーーーいーーーーー！」

田舎のあぜ道でジジイと叫ぶ。ほんの少し前に流行った映画の題名みたいだ。こっちは色気もへったくれもないが。

自分のどうでもいい考えに苦笑いをしていたら、ガラリと玄関が開いたことに気付いた。

「うるっせい！」

こっちに向かってジジイは愛を叫ぶ。……じゃなかった。怒鳴り

声をあげる。

「ジジイ、花火！」

両手を上げた瞬間、ナイスなタイミングで打ちあがる花火が、空を明るく染める。

おばちゃんは僕に「サプライズしてやれ」って、アドバイスしてくれた。粋だね、おばちゃん。

「うるせーんだよっ！ 何時だと思ってやがるっ」

そう言いながらも、ジジイは楽しそうに笑って僕の方に近付いてきた。

「九一才の夏を祝って、九十一連発の花火を用意してきたんだ！ 十連発花火が九本に、最後はこれ！」

花火がつまったビニール袋から僕は締めの花火を取り出した。僕の腕くらいの太さがある打ち上げ花火。パッケージには『ひっさつ！ ツバメ返し！』と書いてある。

「去年は悪かったよ。だから、今年は僕たちだけの花火大会だ！」

ジジイはモゴモゴと口を動かし、舞い散る光を見つめる。ジジイのたるんだ皮膚のその下の目に、花火の光がきらきらと映っていた。それはまるで、少年の目のような輝き。

僕は気付いたんだ。

ジジイがモゴモゴ口を動かしている時は、何か言おうとしている時か、照れている時。

ジジイは少年の目でずっと空を見上げ、モゴモゴと口を動かし続ける。

「*@\$¥>U」

やっと何か言ったと思ったら宇宙語だし。ジジイの言語ってなんなんだよ。

でも、僕にはなんとなく「ありがとう」って言ったような気がした。

いや、ほんとはよくわかんないけどね。

八月八日：ジジイとバイバイ（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございました。

今回のお話は私の祖父がモデルだったりします。

モデルなだけでこんなジジイではないですが。

「いつ迎えが来てもいい」というようなことをたまに言う祖父。

でもやっぱり長生きしてほしいですね。

なんとなく胸に残るような話を目指してみました、いかがでしたでしょうか？

ご意見ご感想お待ちしております。

読者の皆様のおじいちゃんおばあちゃんの健康と長生きを祈っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4229c/>

うちのジジイ、知りませんか？

2010年10月11日04時13分発行